

## 日本語における伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」 の比較：通時語用論的観点から

玉地 瑞穂  
静岡大学

Both 'say' derived evidential markers and Lexical Quotative Constructions (LQC) (Michael 2012) express hearsay evidential meaning. This study examines the pragmatic difference between 'say' derived evidential marker *tote* and LQCs *to-iute* and *to-ifute* in the classical Japanese. The findings reveal that pragmatic usage of evidential marker is related to the source of information and those of LQCs are related to the source of utterance, which is similar to the relationship attested among typologically different languages.

キーワード： 証拠性方略、伝聞証拠性のマーカー、語彙的引用構造

### 1. 「証拠性方略」に関する研究と本研究の意義

証拠性 (evidentiality) とは、話し手の情報源を示す機能をする言語学的現象である (Chafe & Nichols 1986; Aikhenvald & Dixon 2003; Aikhenvald 2004; Aikhenvald & LaPolla 2007)。証拠性は情報源や知識に対する確信度を表す接尾辞である文法化した証拠性のマーカー (evidential markers) (例：日本語における「ようだ」や「らしい」) によって表されるが (Boas 1947: 237, 245)、テンスやムードなどを表すマーカーのように動詞の語形変化からの意味拡張によって表わされる場合もある。このように、本来証拠性を表す言語形式ではないものが意味拡張によって二次的に情報源を評価する意味を持つようになる現象を「証拠性方略 (evidential strategies)」(Aikhenvald 2004: 105) と言い、最近では証拠性方略の研究も証拠性の研究に含まれるようになってきた (例：Mushin 2012)。

証拠性方略の1つの例として、動詞「言う」を用いて他人から得た情報であることを意味する伝聞証拠性 (hearsay evidential) を表す現象が様々な言語において報告されている。これらの例として、中国語諸語では台湾普通語の *shuo* (Wang, Katz & Chen 2003; Su 2004) やビン南語の *kong* (Chang 1998)、インドネシア語の *katanya* (「言う」を意味する *kata* と3人称を表す *-nya* から成る) (Englebretson 2003, 2007) などが挙げられる。

文法化は特定の用法の出現頻度によって進行することから (Hopper & Traugott 2003)、

「証拠性方略」によってこのような語彙的意味の強い言葉を用いた言語形式が証拠性のマーカ―へと文法化していくことが指摘されている (Aikhenvald 2011)。したがって、これらの動詞「言う」を用いた伝聞証拠性を表す言語形式も、出現頻度の増加に伴って文法化した伝聞証拠性のマーカ―に発展していくことも考えられる。

また、動詞「言う」の活用形の一部と引用補語マーカ―から成る引用を表す言語形式があり、Michael (2012) はこれらの引用を表す言語形式を「語彙的引用構造 (Lexical Quotative Construction)」と定義した。これらの「語彙的引用構造」が伝聞証拠性の機能をする場合があり、それらを「証拠性方略」として扱うかどうかが議論されている。しかし、最近の研究では、これらを区別する方法として、両者の語用論的用法の違いが有効な手段であることが報告されている。以下、Michael (2012) によって報告された南米アマゾンのアラワク語のひとつであるナンティ語における動詞「言う」から派生した伝聞証拠性のマーカ―と「語彙的引用構造」の違い及びそれらの語用論的用法について述べる。

Michael (2012) によれば、ナンティ語には、動詞「言う」を意味する *kant* と引用補語マーカ―を用いて引用を表す「語彙的引用構造」と *kant* が文法化した伝聞証拠性のマーカ―*ka* がある。次の例 (1) は「語彙的引用構造」を使用した引用の用法、(2) は伝聞証拠性のマーカ―を使用した引用の用法である。例 (1) では動詞「言う」を意味する *kant* はほぼ屈折のない現実 (realis) の非完了形の形で補語 (この場合は *ari*) とともに用いられる。例 (2) の *ika* は情報源となる人称の情報を表す *i* (3 人称男性主語) と *kant* が文法化した *ka* から成る言葉である。例 (2) のように、伝聞証拠性のマーカ―はしばしば人称の情報を表す言葉と *kant* が文法化した *ka* の二音節で表される。

- (1) Paniro pigogine nokigaka, ari ikanti.

*paniro pi=kog -ne no=kig -ak -a*  
 one.ANIM 2S=barbasco -ALIEN.POS 1S=dig -PERF -REAL.A  
*ari i= kant -i*  
 POS.POL 3mS= say -REAL.I<sup>1</sup>

“I dug up one of your barbasco plants”, indeed he said.

(cited in Michael 2012, pp. 163)

- (2) Ikahemake ika tahena aka.

*i= kahem-ak -i ika tahena aka*  
 3mS= yell -PERF -REAL.I QUOT.3m come.IMP here

<sup>1</sup> ANIM:animacy, IMP: imperative, PERF: perfective, POL: polite, POS: possessive, PEAL: realis, QUOT: quotative, 1S: 1<sup>st</sup> person subject, 2S: 2<sup>nd</sup> person subject, 3mS: 3<sup>rd</sup> person masculine subject

‘He yelled, “Come here!”

(cited in Michael 2012, pp. 160)

また、Michael (2012) はナンティ語の「語彙的引用構造」と伝聞証拠性のマーカーを用いた文では、前者は話し手が聞き手に対して断定的な態度を表すのに対し、後者はそうではないという違いがあることを報告している。これらのことは、「語彙的引用構造」や伝聞証拠性のマーカーを使用して話し手の態度を表明する場合があることを示唆しており、これらを語用論的用法と捉えることができる。

伝聞証拠性は他人から伝え聞いた情報であることを意味することから、話し手が「これは人々が言っていることであって、その真偽性について自分は責任を負わない」(Willett 1988: 52-53) という態度を表明するために使用される。このような伝聞証拠性の性質から、これらのマーカーの語用論的用法には話し手の命題の真偽性に対する責任を軽減する用法や話し手が得た情報が予想外であった時の驚きを表す用法があることが様々な言語において報告されている(例: Wang, Katz & Chen 2003; Leuong 2006, Ahn & Yap 2014)。

一方、「語彙的引用構造」の語用論的用法の研究は、伝聞証拠性のマーカーの語用論的用法との比較という観点から行われているものが多い。例えば、テワ語やパプア語では情報の信頼性と真実性がある場合は伝聞証拠性のマーカー、情報の信頼性と真実性がない場合は「語彙的引用構造」を用いて引用を表すことが報告されている(Kroskity 1993, Aikhenvald 2004)。Güldemann (2008) は、北アフリカの諸言語においてこれらの「語彙的引用構造」の語用論的用法は、話し手の命題の真偽性に対する確信度を軽減するものではなく、話し手が前の話し手に対する異論を表す用法であることを報告している。

このように、伝聞証拠性のマーカーの語用論的用法と「語彙的引用構造」の語用論的用法の関係は言語によって違っているが、Michael (2012) は伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」の語用論的用法の違いは Levinson (1988: 186) による発話源 (illocutionary source) と情報源 (informational source) の違いに対応していると述べている。Levinson (1988) は、情報を伝達することと情報源を区別し、話し手が他人から伝え聞いたことについて述べる場合とテレビのコマーシャルのように特定の目的で他人が述べたことについて述べる場合が異なっていると考えている。したがって、「語彙的引用構造」の語用論的用法は発話源、伝聞証拠性のマーカーの語用論的用法は情報源を指していると考えられている。さらに、これらの研究は、伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」を区別するためには、それらの語用論的用法を比較することが効果的であることを示唆している。

このような「語彙的引用構造」や動詞「言う」が関係する伝聞証拠性のマーカーで語用論的用法を持つものとしては、古典日本語の「と言うて」と「と言ふて」、「とて」が挙げ

られる。日本語のような SOV 言語においてこれらの言語形式が語用論的用法を持つということは、文末で使用されることを意味している。これらの格助詞「と」あるいは動詞「言う（言ふ）」にテが接続している「テ形接続文」と呼ばれるもので、節と節を連結する副詞的従属節のような機能をし（益岡 1997）、主節が後続する。下の例（3）は「とて」の伝聞証拠性の用法である。従属節「こと人のもとへいきたる」とて」の後に主節「（私は）はら立つよ。」が存在する。例（4）は伝聞証拠性の用法であるが文末で使用されている。この例のように文末で使用される伝聞証拠性の「とて」は、伝聞証拠性のマーカーとして十分文法化し、連用形として句と句を連結する環境だけに出現することにとどまらなくなったことを示している。

- (3) わかきをとこ持ちたるだに見ぐるしきに、こと人のもとへいきたるとてはら立つよ。

（若い男と付き合っていることさえ見苦しいのに、この若い男のもとへ行くと聞いて腹立たしいことだ。）

（「枕草子」, p. 93, 1001）

- (4) 二月晦がたよりはなほ楼にて習はしたてまつりたまふ。山の景色色づく見るも、いとおかしとて。

（二月の末ごろから益々楼にこもって勉強をしていらっしゃる。山の木の葉の色が緑色に変わっていくのを見るのがとても興味深いらしい。）

（「宇津保物語」, p. 474, 10th c.）

このような非定形表現 (non-finite form) の定形構造 (finite structure) としての再解釈は、現在ではかなり広範囲に知られているメカニズムである主節の省略 (main-clause ellipsis) によって「といひて」を含む従属節が独立化して主節になったためである (subordination) と考えられている (Evans 2007)。このような主節の省略は、文脈や共有の知識を持つことから主節の中の命題が明確な場合や、主節を言うことが話し手が聞き手、または双方にとって面目を失わせることになることによるものと考えられる。

例（5）は「とて」の語用論的用法で、話し手が聞き手に対して注意を促していると考えられる。この「とて」の語用論的用法の詳細な説明は第5節で行う。

- (5) 浄土僧： でもそなたが急ぐによって、愚僧も急いだ。

（でもあなたが急ぐから、私も急いだ。）

法華僧： いかにも急げばとて。

（いくら私が急いだからって。）

（「出家座頭狂言宗論」, p. 22, 14th c.）

このような「とて」の語用論的用法は、話し手のプロソディーにとって理想的な着地地

点である文末で使用されることで、文脈に誘導され、語用論的ニュアンスを帯びることによって発展したものと考えられる。

本研究では、古典日本語の「とて」と「と云うて」・「と言ふて」の語用論的用法の比較から、古典日本語における動詞「言う（言ふ）」を使用した証拠性方略によって文法化した伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」の関係を分析する。本研究の構成は以下のとおりである。第2節ではデータと研究方法について、第3節では「とて」と「と云うて」・「と言ふて」の「と言ひて」との関係及びそれらの意味変化の過程について述べる。第4節では「とて」の語用論的用法、第5節では「と云うて」・「と言ふて」の語用論的用法について述べる。第6節では「とて」と「と云うて」・「と言ふて」の語用論的用法の違いを比較し、古典日本語における伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」の関係を考察する。第7節ではまとめと今後の課題について述べる。

## 2. データと研究方法

本研究では、日本古典文学大系（岩波書店）を国文学研究資料館によって電子化された大系本文データベースに基づく通時的分析を行う。大系本文データベースは8世紀から19世紀までに書かれた歌集や歴史的な文書、物語、随筆、狂言の台本、小説など556作品、27,521,040字から成るデータベースである。大系本文データベースの中に現れたそれぞれの言語形式のトークン数は動詞「言う（言ふ）」が関係していると思われる「とて」が9378、「と云うて」が138、「と言ふて」が430であった。これらの語用論的用法を抽出し、比較・分析することによって、古典日本語における動詞「言う（言ふ）」を使用した「証拠性方略」によって文法化した伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」の関係の類型論的特徴を分析する。次節では、これらの言語形式が動詞「言う（言ふ）」を使用した「証拠性方略」によって派生したものであることを主張するために、これらと「と言ひて」との関係について述べる。さらに、これらの意味変化の過程についても述べる。

## 3. 「とて」と「と云うて」・「と言ふて」と「と言ひて」の関係と意味変化の過程

古典日本語の動詞「言ふ」を用いて引用や伝聞証拠性を表す言語形式には、格助詞「と」と動詞「言ふ」の連用接続形である「言ひて」から成る「と言ひて」がある。表1は大系本文データベースで確認された「と言ひて」の機能とそれらの機能のトークン数を1世紀ごとにまとめたものである。<sup>2</sup> この表からわかるように、「と言ひて」は8世紀から19世

<sup>2</sup> 大系本文データベースでは、「言ふ」や「と言ひて」などに関する表記には漢字を用いたものとひ

紀までの間に 762 のトークン数が確認されており、動詞「言う（言ふ）」の語彙的意味の他、「～と言う名前の N」を意味する名付け (labeling)、引用、伝聞証拠性、トピックマーカ―としての用法が確認されている。しかし、そのほとんどが動詞「言う（言ふ）」の語彙的意味として使用されており（全トークン 762 のうち 637 が語彙的意味用法）、伝聞証拠性のマーカ―や語用論的マーカ―としての機能は確認されなかった。

「と言ひて」の機能	1 世紀ごとの「と言ひて」のトークン数												
	8 <sup>th</sup>	9 <sup>th</sup>	10 <sup>th</sup>	11 <sup>th</sup>	12 <sup>th</sup>	13 <sup>th</sup>	14 <sup>th</sup>	15 <sup>th</sup>	16 <sup>th</sup>	17 <sup>th</sup>	18 <sup>th</sup>	19 <sup>th</sup>	20 <sup>th</sup>
語彙的意味	95	40	100	12	57	188	32	1		34	45	33	NA
名付け	12	2	11	9	8	5	8	2		2	16	7	NA
引用	6	4	1	1	1	2	1				4	2	NA
伝聞証拠性	2			2							5	2	NA
トピックマーカ―				1				1		2	6		NA

表 1 大系本文データベースに見られる「と言ひて」の機能分布 (NA: not attested)

「とて」は一般的には引用を表す格助詞「と」と接続助詞「て」から成るものと見なされている。岩波古語辞典（大野他 1990）によれば、「とて」は引用や原因、理由、目的を表す句が接続する接続助詞と定義されている。多くの日本語の研究者（例：山田 1936; 吉田 1970; 森脇 1995）は、「とて」は「と」と「て」の間に存在する「言う」や「思う」のような格助詞「と」を伴う動詞が省略されたものと考えている（例：「と言ひて」>「とて」、「と思ひて」>「とて」）。しかし、「と」の引用や伝聞証拠性の用法の発達は比較的遅いものであることから、本研究では前者の「動詞省略説」を支持し、「とて」は「と言ひて」から派生したものとする。次の表 2 は「とて」の機能と 1 世紀ごとの機能のトークン数をまとめたものである。

らがなを用いたものが見られる。本研究の例文は、大系本文データベースに表記されているものを用いたものである。

「とて」の機能	1世紀ごとの「とて」のトークン数												
	8 <sup>th</sup>	9 <sup>th</sup>	10 <sup>th</sup>	11 <sup>th</sup>	12 <sup>th</sup>	13 <sup>th</sup>	14 <sup>th</sup>	15 <sup>th</sup>	16 <sup>th</sup>	17 <sup>th</sup>	18 <sup>th</sup>	19 <sup>th</sup>	20 <sup>th</sup>
語彙的意味	2	9	1185	1148	184	880	528	1791	54	234	239	588	NA
引用		20	56	54	46	33	31	29		50	67	56	NA
伝聞証拠性		7	231	106	99	29	40	81	4	172	125	75	NA
トピックマーカー		17	8	19	1	23	1			5	5	3	NA
引用のマーカー			2	9	3							1	NA
逆接的用法			10	11	13	11	2	12	5	37	41	28	NA
名付け			87	23	62	35	86	135		102	23	79	NA
伝聞証拠性のマーカー			13	4	1	1	2	2		42	130	20	NA
語用論的マーカー							2			2	6		NA

表2 大系本文データベースに見られる「とて」の機能分布

表2から、「とて」は8世紀から19世紀までの文書の中で確認され、8世紀には動詞「言う（言ふ）」の語彙的意味としての用法、9世紀には引用や伝聞証拠性、トピックマーカー、10世紀には引用のマーカーや逆接的用法、名付け、伝聞証拠性のマーカーとしての機能を発展させており、14世紀頃から語用論的マーカーとしての機能を発展させていたことがわかる。

「と言うて」は大系本文データベースでは13世紀ごろに出現した。中世日本語において、関西地方を中心に「ひ」が「う」に変化するウ音便が起り（近藤・月下・杉本2005）、「と言ひて」は「と言うて」に変化したことから、「と言うて」は「と言ひて」の音声の変異形であると考えられる。表3は「と言うて」の機能と1世紀ごとの機能のトークン数をまとめたものである。

「と云うて」 の機能	1世紀ごとの「と云うて」のトークン数												
	8 <sup>th</sup>	9 <sup>th</sup>	10 <sup>th</sup>	11 <sup>th</sup>	12 <sup>th</sup>	13 <sup>th</sup>	14 <sup>th</sup>	15 <sup>th</sup>	16 <sup>th</sup>	17 <sup>th</sup>	18 <sup>th</sup>	19 <sup>th</sup>	20 <sup>th</sup>
語彙的意味						2	19	6			19		WA
引用						1	6						WA
名付け							17	18			5		WA
トピック マーカー							4	7					WA
逆接的用法							11	7			3		WA
伝聞証拠性								1					WA
伝聞証拠性の マーカー								1			4		WA
語用論的 マーカー							4				3		WA

表3 「と云うて」の機能分布 (WA: widely attested)

表3から、「と云うて」は13世紀から確認され、20世紀以降の現在でもその使用が確認されている。13世紀には動詞「言う（言ふ）」の語彙的意味と引用の用法、14世紀には名付けやトピックマーカー、逆接的用法、語用論的マーカー、15世紀には伝聞証拠性と伝聞証拠性のマーカーとしての機能を発展させていたことがわかる。

「と言ふて」も「と云うて」と同様、13世紀頃から確認された。「と言ふて」の出現には中世に起こった /p/>/f/ への音声変化 (Frellesvig 2010: 314-6) が関与していると考えられる。古典日本語において /h/ は /p/ と発音されていた。17世紀の始めに /p/ の表記が発明されるまで /h/ と /p/ の音を区別する表記が存在しなかったため、「と言ひて」は実際には /toipite/ と発音されていたと考えられる。中世においてウ音便が起こる一方で、強い感情などを表す言葉に関しては引き続き /pi/ が使用されていた。しかし、中世の終わりごろ、/p/ から /f/ への変化が起こったため、/toipite/ が /toifite/ に変化したものが「と言ふて」と標記され、話し手の感情を表す場合に使用されていたのではないかと考えられる。実際、大系本文データベースでも「と言ふて」は歌舞伎や物語などで多く使用されている。表4は「と言ふて」の機能と1世紀ごとの機能のトークン数をまとめたものである。



「と言ふて」 の機能	1世紀ごとの「と言ふて」のトークン数													
	8 <sup>th</sup>	9 <sup>th</sup>	10 <sup>th</sup>	11 <sup>th</sup>	12 <sup>th</sup>	13 <sup>th</sup>	14 <sup>th</sup>	15 <sup>th</sup>	16 <sup>th</sup>	17 <sup>th</sup>	18 <sup>th</sup>	19 <sup>th</sup>	20 <sup>th</sup>	
語彙的意味						1	4			45	22	196	NA	
引用							1			17	9	8	NA	
トピック マーカー							1			7	6	1	NA	
逆接的用法								1			2		NA	
名付け										13	22	26	NA	
伝聞証拠性										7	8	3	NA	
伝聞証拠性の マーカー											1	10	NA	
語用論的 マーカー											12	7	NA	

表4 大系本文データベースに見られる「と言ふて」の機能分布

表3から、「と言ふて」は13世紀から19世紀までその使用が確認され、13世紀には動詞「言う（言ふ）」の語彙的意味、14世紀には引用とトピックマーカー、15世紀には逆接的用法、17世紀には名づけと伝聞証拠性、18世紀には伝聞証拠性のマーカーと語用論的マーカーとしての機能を発展させていたことがわかる。

以上、「とて」と「と言うて」、「と言ふて」と「と言ひて」との関係についての考察を行ってきた。これらのことから、「とて」は「と言ひて」の動詞が省略されて派生したもので、「と言うて」と「と言ふて」は「と言ひて」の音声的変異形であると考えることができる。しかし、問題は「とて」と「と言うて」・「と言ふて」が同じ機能をする言語形式かどうか、及びこれらが伝聞証拠性のマーカーか「語彙的引用構造」であるかということである。

これについて、「とて」が伝聞証拠性のマーカーであるという可能性は、類型論的な見解によって支持される。韓国語において、引用句に続く補語マーカー (complimentizer) *ta* と動詞「言う」を意味する *ha*、連用形接続助詞 *-ko* や *-mye* から成る *ta-ha-ko* や *ta-ha-mye* という形式が、引用や伝聞、認識性を表す語用論的マーカーへと発展していくとともに動詞「言う」を意味する *ha* の省略が確認されて *tako* や *tamye* のような形式へと発展していったことが報告されている (Ahn & Yap 2014)。このことは、韓国語と同様、語順がSOVの膠着言語である日本語においても、類似の言語形式である「と言ひて」から動詞「言う（言ふ）」の省略によって伝聞証拠性のマーカーである「とて」が派生した可能性があることを示唆している。

以上のことから、本研究では「とて」を「と言ひて」から派生した伝聞証拠性のマーカー

であると考え。また、「と言うて」と「と言ふて」は「と言ひて」の音声的変異形であり、「と言ひて」よりも意味変化の過程が進んだ言語形式であることから、「語彙的引用構造」と考える。したがって、「とて」の語用論的用法は情報源に関わるもので、「と言うて」と「と言ふて」の語用論的用法は情報源に関するものであると仮定する。以下、大系本文データベースに見られた「とて」と「と言うて」・「と言ふて」の語用論的用法を分析する。

#### 4. 「とて」の語用論的用法

「とて」が文末で使用される例は10世紀ごろから見られるようになった。その後、様々な語用論的用法が確認された。下の例(6)は14世紀に現れたもので、「いかに急げばとて」に後続する「あなたまで急ぐ必要はない。」という文が省略されていると考えられる。さらに、話し手が自分自身の意見を表明する場合に「とて」を使用することによって、自分ではなく他人の意見を引用しているような感じを与える。これによって、話し手が自分発話から自分自身を遠ざけるという効果が生じ、自分の意見を相手に押し付ける際にもやわらかく伝達されるという効果が生じている。

(6) 浄土僧： でもそなたが急ぐによって、愚僧も急いだ。

(でもあなたが急ぐから、私も急いだ。)

法華僧： いかに急げばとて。

(いくら私が急いだからって。)

(「出家座頭狂言宗論」, p. 22, 14世紀)

(7) は17世紀に見られた話し手の強調的な態度を表す用法である。急かす相手に対して「急かすな!」と要求をしているが、例(6)と同様、「とて」を使用することによって自分ではなく他人の意見を引用しているような感じを与え、やわらかく伝達されるという効果が見られる。例(6)は前の話し手の発話の内容を繰り返しているが、例(7)ではそのような繰り返しが無い文脈でも使用されているという違いが見られる。

(7) 大事の娘を吉三には誰が仲人で嫁ったぞ。麁相な事は仰るまい證據を見よと立かゝる。はてやかましう言はひでもこちらからお目に掛けるとて。

(大切な娘を吉三には誰が仲人をして結婚させたのか。軽率なことは言わないで、証拠を見なさいと言って立てろうとする。そんなにやかましく言わなくても、こちらから(その嫁を)お目にかけますから。)

(「八百屋お七」, p. 79, 1668)

(8) は18世紀に書かれた浄瑠璃作品に現れた「とて」の語用論的用法である。これは

「地色」と言われる物語の語りの部分である。これは、姫の乳母となった滋野井と幼いころに捨てた子どもの三吉が再会を果たすが、姫の乳母をしているために親子の名乗りができないという場面である。

(8) ア、いかなる因果な生性。現在我が子に馬追させ。男の行方も知らぬ身が母は衣裳を着飾って。お乳人よお局よと玉のに乗ったとて。

(ああ、なんと因果なことか。現在自分の息子に馬の世話をさせ、夫も行方不明の身分だというのに、母である滋野井は自分だけ衣裳を着飾って乳母や女官に出世して玉の輿に乗ったらしい。)

(「丹波輿作待夜の小室節」, p. 101, 1707)

この例の「とて」は、母親に捨てられ、父親も行方不明になった子供が幼いころから馬子をして生きてきたのに、そんなことも知らずに自分だけ着飾って乳母やお局に出世した母親に対して呆れながら驚きを表している。これは、不特定の他人（第三者）から聞いて得た情報が、一般的な規範に基づいて判断するとその事実は意外であるという話し手のスタンスを表す用法 (counter-expectation) (Traugott and Dasher 2002: 157) であると考えられる。

以上、伝聞証拠性のマーカー「とて」の語用論的用法についての分析を行ってきた。例(6)、(7)は自分の言説に対する責任を軽減しながら相手に自分の意見を押し付ける用法で、例(8)は話し手の驚きを表す用法である。例(6)、(7)は相手に対する反応という間主観的なものであるのに対し、例(8)は話し手の主観性を表すものであるという違いが見られる。しかし、どちらも第三者の意見や規範を基に自分自身のスタンスを表明しているという点で共通点が見られる。

## 5. 「と言うて」と「と言ふて」の語用論的用法について

### 5.1. 「と言うて」の語用論的用法

下の(9)は、室町時代(14-15世紀)に確認された文末で使用されている「と言うて」の例である。

(9) 太郎冠者： もうし、呼ばせられまするか。

(もしもし、お呼びになりますか。)

主： 「呼ばせられまするか」と言うて。なぜにうぐいすのことをぐいすと言うたぞ。

(「お呼びになりますか。」と言ったのか？ どうしてうぐいすのことをぐいすと言ったのか。)

(「小名狂言察化」, p. 338, 14-15 世紀)

(9)の「と言うて。」は、前の話し手の発話を繰り返しながら質問をしている。しかし、これは「本当にあなたは『呼ばせられますか』と言ったのか?」という確認要求の質問という形式で、「あなたは自分が言ったことに責任を持てるのか。私はあなたにはそれができないと思う。」というように相手の意見に対する異論を表明していると考えられる。

例(10)は18世紀の初頭に確認された例(9)と類似の用法であるが、「というて。」だけが独立した(Stand-alone)構造である。大系本文データベースの中で「というて」の引用の用法と文末において使用されている例はそれぞれ7例ずつ確認されたが、「というて。」だけが独立した構造として使用されているものはこの例(10)ただ1つであった(表3参照)。

(10) 語り手： もはや毒も何もかなわず、きまかせにしたほうがよい。

ああ、惜しい人じゃ。

(もはや毒を使っても何を使ってもあいつを殺すことはできない。あいつの気が向くままにした方がいい。ああ、もったいない人が亡くなったものだ。)

夕霧： というて。

(そんなことを言って!)

(「夕霧阿波鳴門」, p. 212, 1712)

この例でも、話し手は前の話し手の発話を繰り返してはいないが、前の話し手の「ああ、(彼は)惜しい人じゃ。」という発言に対して、「というて。」ということは、「本当にあなたは彼を『惜しい人じゃ。』と思っているのか。思っていないだろう。」という意味であると考えられる。これらのことから、例(9)は(10)と同様、話し手が聞き手(前の話し手)に対する確認要求の質問によって相手に発話内容の真偽性に対する責任を追及し、相手に対して異論を表明する用法であると考えられる。

また、例(10)の「というて。」が独立した構造になっているのは、「[XP]というて」の引用部分[XP]である補語句の省略(compliment-clause ellipsis)が関わっている。話し手(夕霧)は(引用句である「惜しい人じゃ」という)補語句を省略して「というて。」を独立した語用論的マーカーとして使用することが可能であった。なぜなら、語り手の発話に対する夕霧の反応は反復的な確認要求のもので、夕霧の意図的な補語句の省略は聞き手(語り手)にとっては容易に理解できるものであるからである。

## 5.2. 「と言ふて」の語用論的用法

「と言ふて」は18世紀には独立した構造で前の話し手の発話に対して話し手の異論を表

明するために使用された例が見られた。下の例 (11) がそれである。

(11) 桂： あまりじゃがの。(お前は余計なことを喋りすぎているぞ。)

佐嶋： はてさて。(困ったなあ。)

桂： じゃといふても。(そんなことを言っても。)

(「幼稚子敵討」, p. 246, 1753)

(11) の「じゃといふても。」は、先述した例 (10) の「というて。」と同様、話し手が前の話し手の発話に対して異論を表明するために使う独立した構造である。これは「といふて」の後に強調を表す助詞「も」が接続したものであり、独立した構造の「といふて」の最初の例である。このことは、独立した構造の「といふて」が出現した当初は「といふて」自体の異論を表明する意味合いが充分ではなかったので「も」のサポートが必要であったと考えられる。

(11) のような独立した構造の「といふても」もまた、従属節の独立化によって非定形の連用形の「といふても」が定形表現として再解釈され生じたものである。そのような従属節の独立化は、それに後続する主節の意味が文脈から推論できることから省略されて生じたものである。(11) では、省略された主節の意味は、「私は自分が知っていることを喋っただけなので」という意味で、前の話者に対して挑戦的な態度になるからその言葉を発しなかったものと考えられる。

また、(11) の例は、主節の省略以外のメカニズムにも関係している。つまり、反復的な引用句である「はてさて」という句の省略である。このような二重の句(主節と補語句)の省略は、間接的な方略を取ることで、独立した「といふても」という構造は異論を表すマーカーとして機能すると考えられる。

例 (12) は (11) より後に確認された独立した構造の「といふて」である。例 (11) と異なり、強調を表す「も」が接続していないことから、この頃には「といふて」自体で異論を表明するようになったと考えられる。

(12) 隼人： こりゃ、主人には覚期の生害。見苦しい、叩いていやれ。

(これは、主人に見つかることを覚悟した自殺だ。)

見苦しい。叩いてやれ。)

名山： それじゃといふて。(そんなことを言っても。)

(「韓人漢文手管始」, p. 367, 1789)

例 (11) は、代官(隼人)が自分の部下の一人(名山)に心中をしようとした受領の部下を罰するように命じた場面での会話である。名山は「それじゃといふて。」と言ってその命令を拒否しようとした。「それじゃといふて。」に続くはずの「私はその命令に従いたくない。」という句を省略することによって、名山は強烈な反対を和らげ、潜在的な面目

をつぶす行為を避けるという効果を生み出している。

(11) と (12) に見られるように、主節の省略による逆接的な二人称の引用（あなたがそう言っても）の再解釈によって異論を表す用法が生じたものである。このことから、主節の省略によって文末に位置するようになった「といふて」は、話し手の語尾の抑揚に対する着地地点として機能し、これによって文末における引用の用法が語用論的用法として再解釈されるようになったと考えられる。

## 6. 「とて」と「と言うて」・「と言ふて」の語用論的用法の比較

以上、大系本文データベースにおいて見られた「とて」と「と言うて」・「と言ふて」の語用論的用法の分析を行ってきた。「とて」と「と言うて」・「と言ふて」の語用論的用法の違いとして、以下の点があげられる。

「とて」には話し手が命題の真偽性に対する責任を減少する用法や話し手が得た情報が予想外であった時の驚きを表す用法、「と言うて」と「と言ふて」には話し手が前の話し手に対して異論を表明する用法が確認された。(6) の「とて」は、話し手が対話において前の話し手の発話に対して異論を表明しているように考えられる。しかし、「と言うて」や「と言ふて」を使用して異論を表明するような相手を責めるようなものではなく、「私が急いだからと言って、あなたまで急ぐ必要はない。」という感じで柔らかく相手に注意するような用法である。つまり、「とて」は聞き手に対して異論を表明するときにも、「人々がそう言ったとしても」というように、より間接的に不特定の第三者からの情報源を基に、相手に対して反対の気持ちを表現するように使用されていると考えることができる。したがって、(6) は聞き手に対して異論を表明しているが、不特定多数の人々が持っている規範的な観点に基づいて話し手の命題の真偽性に対する確信度を軽減する用法であると考えられる。

さらに、「とて」には (8) のように話し手の予想外の驚きを表す語用論的用法が確認されている。この驚きを表す場合も、不特定の他人（第三者）から聞いて得た情報が、一般的な規範に基づいて判断するとその事実は意外であるという話し手のスタンスを表す用法であることから、情報源に関わる語用論的用法であると考えられる。

以上の語用論的用法の違いは、「とて」は伝聞証拠性のマーカーであり、「と言うて」と「と言ふて」は「語彙的引用構造」であることを示唆していると考えられる。さらに、「とて」の語用論的用法は情報源に関わるものであるが、「と言うて」と「と言ふて」の語用論的用法は発話源に関わるものであることから、日本語の伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」の語用論的用法の違いは、他の言語と同様、Levinson (1988: 186) による情報源と発話源の違いに対応していると考えられる。また、この情報源と発話源の違いは、「とて」と「と言うて」・「と言ふて」の形態論的特徴の違いとも対応していると考えられ

る。先述したように、これらはともに引用や伝聞証拠性の用法を持つ「と言ひて」から派生したものであると考えられる。第三者から得た情報に基づいて話し手の命題の真偽性に対する確信度を和らげる語用論的用法を持つ「とて」が「と言ひて」の動詞省略によって生じたものであることは、意味的漂白によって情報源の不特定性を表していると考えられる。一方、「と言ひて」の音声的変異形である「と言うて」・「と言ふて」が「語彙的引用構造」であることは、音声的变化によって発話源の特定性を表していると考えられる。

## 7. まとめ

本研究では、「とて」と「と言うて」・「と言ふて」の語用論的用法の比較から、「とて」の語用論的用法は情報源にかかわるものであったのに対し、「と言うて」・「と言ふて」の語用論的用法は発話源にかかわるものであったという違いが見られた。このことは、「とて」が文法化された伝聞証拠性のマーカーで、「と言うて」・「と言ふて」が「語彙的引用構造」であり、両者は異なる機能を有する言語形式であることを示唆している。さらに、これらの比較から、古典日本語における伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」の語用論的用法の関係は、言語類型論的に報告されているものと類似しているということがわかった。今後は「とて」や「と言うて」・「と言ふて」が語用論的マーカーへと発展していく過程における統語論的变化の分析も行いたい。

## データベース

大系本文データベース (国文学研究資料館)

## 参考文献

- Ahn, M.K. and Yap, F. H. 2014. "On the Development of Korean 'Say' Evidentials and their Extended Pragmatic Functions." *Diachronica* 31 (3), 299-336.
- Aikhenvald, A. Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, A. Y. and Dixon, R. M. W. 2003. *Studies in Evidentiality*. Amsterdam: John Benjamins.
- Boas, F. 1947. 'Kwakiutl grammar, with a glossary of the suffixes', *Transactions of the American Philosophical Society* 37: 201-377.
- Chafe, W. and Nichols, J. 1986. *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. New Jersey: Ablex.
- Englebretson, R. 2003. *Searching for Structure: The Problem of Complementation in Colloquial Indonesian Conversation*. Amsterdam: John Benjamins.
- Englebretson, R. 2007. "Grammatical Resources for Social Purposes: Some Aspects of Stan-

- cetaking in Colloquial Indonesian Conversation.” In R. Englebretson (ed.), *Stancetaking in Discourse: Subjectivity, Evaluation, Interaction*. [Pragmatics & Beyond New Series 164]. Amsterdam: John Benjamins.
- Evans, Nicholas. 2007. “Insubordination and Its Uses.” In I. Nikolaeva (ed.), *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, 366–431. Oxford: Oxford University Press.
- Frellesvig, B. 2010. *A History of the Japanese Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Güldemann, Tom. 2008. *Quotative Indexes in African Languages. A Synchronic and Diachronic Survey*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Hopper, P. J. and Traugott, E. C. 2003. *Grammaticalization, 2nd edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 近藤泰弘・月本雅幸・杉本克己. 2005. 『日本語の歴史』東京：放送大学教育振興会.
- Kroskrity, P. V. 1993. *Language, History, and Identity: Ethnolinguistic Studies of the Arizona Tewa*. Tucson and London: University of Arizona Press.
- Levinson, S. C. 1988. “Putting Linguistics on a Proper Footing: Explorations in Goffman’s Participation Framework.” In P. Drew and A. Wootton (eds.), *Goffman: Exploring the Interaction Order*. 161–227. Oxford: Polity Press.
- Leung, Wai-mun. 2006. On the Synchrony and Diachrony of Sentence Final Particles: The case of *Wo* in Cantonese. PhD Dissertation, University of Hong Kong.
- 益岡隆志. 1997. 『複文』東京：くろしお出版.
- Michael, L. 2012. “Nanti Self-quotation: Implications for the Pragmatics of Reported Speech and Evidentiality”, In J. Nuckolls and L. Michael (eds.), *Evidentiality in Interaction*. 155–191. John Benjamins.
- Mushin, I. 2012. “‘Watching for witness’: Evidential Strategies and Epistemic Authority in Garrwa Conversation”, In Nuckolls and L. Michael (eds.), *Evidentiality in Interaction*. 103–126. John Benjamins.
- 森脇茂秀. 1995. 「助辞『とて』の成立過程・意味用法をめぐって(2)」『山口国文』18: 69–82.
- 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎. 1990. 『岩波・古語辞典・補訂版』東京：岩波書店.
- Su, L. I., 2004. “Subjectification and the Use of the Complementizer SHUO. Concentric.” *Studies in Linguistics* 30(1), 19–40.
- Traugott, E. C. and Dasher, R. B. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge University Press.
- Wang, Y., Katz, A., and Chen, Z. 2003. “Thinking as saying: *Shuo* (‘say’) in Taiwan Mandarin Conversation and BBS Talk.” *Language Sciences* 25(5), 457–88.
- Willett, T. L. 1988. “A Cross-linguistic Survey of the Grammaticalization of Evidentiality.” *Studies in Language* 12, 51–97.
- 山田孝雄. 1936. 『日本語文法学概論』東京：宝文館.
- 吉田金彦. 1971. 『現代語助動詞の史的研究』東京：明治書院.